

布団縞

片柳 草生

何年前、新潟の岡崎康行さんから聞いた忘れられない話がある。

コスモスに入会して間もない岡崎さんが、三鷹台を訪れて父と話をされていた折りのこと。挨拶をして傍らを通り過ぎようとする私に向かって、「なんだ、そんな布団縞みたいなスカートを穿いて」と父が言ったという。

私の記憶は薄いのだが、父なら言いそうなことだ。私が出版社へ入って間もない頃で、買ったばかりのミニスカートを穿いていたのだと思う。ミニスカートは、イギリスのモデル、ツイッギーの影響で一九六〇年代後半に大流行。誰もが小枝の如く華奢で足の長い彼女のミニ姿に憧れ、ツイッギーと似ても似つかぬ我が身を顧みず、短いスカートで闊歩したのだった。

私のスカートは、森英恵のひよしやで求めた。当時、できあいの既成服を売る店は数えるほどしかなく、新宿の店へ何度も下見に通って、「えいやっ」と決断をした。緑色の地に赤や紺、白の大きな格子模様。ローウエストの短い丈で、しかもバイアス裁ちだ。大胆に交差する斜め格子がとても気に入ったのだ。父は膝小僧丸出しの姿に肝を潰し、怒鳴りたいところを岡崎さんの手前、抑えに抑え「布団縞」と言い放ったに違いない。

まったく失礼してしまうが、敷布団の布団皮は、確かに大きな格子柄が多かった。この話を聞いて、反射的に思い出したのが丹波布だ。

手織りの縞木綿が全国で盛んに織られるようになったのは一九世紀の頃で、兵庫県青垣町で織られていた佐治木綿は、布団や夜着用に京都へ出荷された。



写真／宮下直樹

後年、民芸運動の柳宗悦は京都の蚤の市で古布を蒐集、その魅力を語った。

「用ゐられた色の種類、僅かに四種。茶と緑と藍と白と。そうして是等の濃淡、複合によつて驚くべき多様の「縞もの」を生んだ」そして「いつも気づかれるのは其色調の美である」ともいつている。

白は絹のくず糸で、緯糸に用いられる。白い緯縞が加わると、不思議なこと
にハイカラな格子に生まれ変わる。宗悦は丹波布たんぱぬのと名付けて、地元では技術保

存運動が続けられてきた。

ブックカバーは、若い織り手の
もので、藍、栗、こぶな草で染色。
私の布団縞スカートより、はるか
に大人しい柄行きだ。機械織ウー
ルに比べると、綿を手紡ぎして織
った風合は素朴さが漂うが、なん
といても手触りが心地いい。文
庫本のページを繰る楽しみを誘う。
手織りは勿体なくて、今や布団
皮に使うことなどできないけれど
布団縞だった時代は、さぞかし氣
持いい寝心地だったことだろう。